様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ１４９４５

研究課題名（和文）『築山庭造伝』前編・後編にみる作庭技術とその流布に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study of Garden Design Techniques and Their Dissemination as Seen in Tsukiyama teizoden

研究代表者
高橋　知奈津（Chinatsu, Takahashi）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・室長

研究者番号：００５１６６０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸時代後期に出版された『築山庭造伝（前編・後編）』に記載された内容から、近世の造園技術や意匠的な特徴について分析するために当該史料の読解を進めたほか、比較検討対象として同時代に日本に持ち込まれたとみられる造園古書『園冶』の読解を進めた。また、特に山陰地方の民家庭園の現地調査を通じて、江戸時代後期から近代にかけての民家庭園の特徴の把握をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『築山庭造伝』や『園冶』等の近世に流布した造園書の研究としてはまだまだ課題が多いものの、住宅や町家等に伴う座敷庭の特質と変遷を把握し、文化財として保存していくための基礎的な検討を進めることができた。特に近世に遡る民家建築は全国に保存されているため、これに伴う庭園についても学術的な評価を進めていく必要があり、今後の研究の発展的展開が期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the contents of “Tsukiyama Teien Den (Parts I and II),” published in the late Edo period, to examine the landscape gardening techniques and design characteristics of the early modern period. In addition, the study advanced the interpretation of “Enji,” an ancient landscape gardening text believed to have been introduced to Japan during the same period, as a comparative reference.Furthermore, through field surveys of private gardens in the San'in region, this study sought to identify the characteristics of private gardens from the late Edo period to the modern era.

研究分野：庭園史

キーワード：築山庭造伝　近世庭園　造園技術　造園書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近世は、露地（茶庭）が成立すると共に、公家や大名による大規模な回遊式庭園が営まれ、日本庭園史上最も華やかな庭園文化が展開した時代であり、特に江戸時代前期が近世庭園の隆盛のピークとして、時代を下るに伴い、庭園は堕落に陥ったと評価されていた。このような「優品主義的研究」に異を唱えたのが、白幡洋三郎である（白幡洋三郎『大名庭園 江戸の饗宴』1997）。白幡は、庭園を社会的な存在と考え、その「利用」に着目し、「社交」と「儀礼」の場としての大名庭園研究をおこない、近世庭園史研究に大きな一石を投じた。

白幡以前の庭園史研究者が、庭園を堕落に貶めた最たる原因と考えたのが、江戸中期から後期に、巷に溢れた「造園書」の類である。これらの「造園書」のうち、現在でもその和綴の複製本が流通しているのが『築山庭造伝』である。『築山庭造伝』は、享保 20 年（1735）に、北村援琴斎著、藤井重好画の作庭書で、上・中・下の３巻３冊からなり、地割や石の取り扱いに関する考え方や技術、また植栽や養魚等の実用的、具体的な方法が記載され、実例の紹介として、当時実在した庭園を詳細に描いた絵図を多く掲載する。これが、文政 11 年（1828）に秋里籬島によって『築山庭造伝前編』として再編され、『築山庭造伝後編』を加えて、それぞれ上・中・下３巻３冊で出版された。前編中巻と下巻は当初絵図のみであったものに、秋里が本文を追記したものである。特に後編の「真行草の築山庭」、「真行草の平庭」は、この図をそっくりそのまま再現したかのような庭園が各地にみられることが指摘されており、江戸時代後期における本書の影響力を物語る。この類の庭園は「『築山庭造伝』風の庭」すなわち“マニュアル通りの庭”として、その価値が高く評価されない傾向にあった。

しかし、庭園の社会的な側面を考えたとき、この書物が江戸時代後期に爆発的にヒットし、全国各地で本書を参考にした庭園が営まれた現象を、看過することはできないだろう。おそらくこの現象には、作庭に関する技術的な側面にも関連があり「優劣」のバイアス無しに、本書および近世の中小規模の庭園を正当に評価する必要がある。

２．研究の目的

上記背景を踏まえ、本研究では、『築山庭造伝（前編・後編）』の翻刻、解説をおこなうための精読を進め、その書誌学的な位置付けを明らかにすること、また現地調査を通じて「『築山庭造伝』風の庭」を全国的な展開の中で比較研究し、個別の技術的・意匠的特徴がどのような点に現れているのか、検討分析することを研究目的として設定した。

３．研究の方法

本研究では、①『築山庭造伝』の精読、②同時代に日本に流入したと考えられる造園書『園冶』の読解、③近世近代民家庭園の現地調査をおこなった。当初、①について造園技術の専門家や近世史研究者との協働を企画していたが、感染症流行の折に頓挫し、その後十分な取り組みをおこなうことができなかった。一方、中国建築史研究者との共同研究の機会を得て②の研究を新たに進めた。また鳥取県内の民家庭園を調査する機会を得ることができたため、③では山陰地方を中心に調査を進めた。

４．研究成果

（１）『築山庭造伝（前編・後編）』の意義

『築山庭造伝』を文政 11 年に再編した際にどのような意図で編集をおこなったのかを明らかにするため、享保 20 年『築山庭造伝』の紙面構成・内容との比較をおこなった。その結果、寺院等の一般庶民が名所として触れることのできる庭園を手本に自宅等において参考にできる庭園様式の総合化をはかったこと、真・行・草の庭園を図案化、蹲踞構え・縁先手水構えの定型化により、江戸時代の格式ある空間から日常的な空間にまでに汎用性を高める狙いがあったという仮説が得られた。

一方、先行研究により享保 20 年『築山庭造伝』は寛政 11 年刊行の『都林泉名勝図会』の前提となった書物であることが明らかとなっており、この時すでに秋里は本書の存在に触れていたことが確かであるが、これを文政 11 年という最晩年に発刊した経緯や版本としての来歴については今後の課題として残された。

（２）『園冶』との比較

『築山庭造伝』後編上巻に記載の「玉川庭」をはじめとする文人趣味的な庭園について考察深めるために、『園冶』のとの比較研究をおこなった。『園冶』は中国・明代に造園家の計成が、著した造園書であり、日本には明代刊本と清代写本（『奪天工』）が複数存在する。詩歌や絵画、歴史的故事を下敷きにしつつ造庭法を解説する点で両者は共通する部分があるが、江戸時代を

通じた日本国内での流通については課題となった。

（３）山陰地方の民家庭園の特質

鳥取県内には近世以来の民家建築が多数残されている。上手もしくは下手の手前隅に上座敷を設け、これをＬ字に取り囲むように庭園を設ける。これらの庭園は、住宅の敷地を取り囲む土塀までの限られた敷地の中に築山泉水庭を設けることを定型とし、その規模により「行」もしくは「草」の築山庭に近い構成を取る。建物側に平場を設けて飛石を打ち、池に斜めに橋をかけて対岸へ向かう。築山側に六角形灯籠、池辺に雪見灯籠、縁先手水構えを配置する。米子高田氏庭園をはじめ、近世に遡る庭園ほど築山庭の原則を順守する傾向にあり、近代の敷地拡大に伴い庭園も拡大し、踏分石を多用する逍遥性の確保、流れの導入、数寄屋趣味が特徴として現れるようになる。これらは近代的な特徴として捉えることができるが、『築山庭造伝』に掲載の玉川庭に類する矢田貝家庭園（伯耆町）など、近世以来の手法のバリエーションが近代に展開したとみなすことも可能であり、今後さらなる検討が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高橋知奈津	４．巻 なし
２．論文標題 農家型民家の庭園	５．発行年 2024年
３．雑誌名 鳥取県庭園調査報告書	６．最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋知奈津・池田智美	４．巻 なし
２．論文標題 町家型民家の庭園	５．発行年 2024年
３．雑誌名 鳥取県庭園調査報告書	６．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 高橋　知奈津
２．発表標題 『築山庭造伝』を読む
３．学会等名 藝術学舎：資料による日本庭園史研究の多彩な世界
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 呉 肇釗、高橋 知奈津、李 暉、岩谷 季久子	４．発行年 2023年
２．出版社 科学出版社東京	５．総ページ数 416
３．書名 中国古典庭園 園冶図解	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関